

ルールに沿って小刻みに揺れる洗面所の鏡の前で、私は柔らかな橙色のハンカチで手を拭く。ハンカチをしまし、黒い前髪を整える。白い額が柔らかく光を反射する。次に目元の最終確認。マスクをしていても記憶に残るほどに芯があり、それでいて主張しすぎない化粧。手直しの必要は無さそう。最後に襟元や胸元に糸くずやほこりが付いていないか確かめる。ブローチの小さな傾きを直して、今日もぼつちりだ。私は洗面所のカーテンを開け、後輩が待つ席へ戻ろうとデッキの細い通路を歩く。席に戻ると、私に気付いた後輩が席を立った。少し見上げながら礼を言う。

「お待たせ、水島くん。悪いわね」

窓側の席に私を座らせ、彼はどすんとその大きな体を赤いシートに預けた。入社二年目になったばかりとは思えない貫禄だ。

南風 こまち

「いえいえ、間違えるようになりましたね」

後輩は丸く突き出した腹を揺すりながら軽口を叩いた。「何言ってるのよ、私はこれが普通でしょ」

口ではそう言いつつも、私もマスクの下でくすりと笑みをこぼす。これから取引先との商談なのだが、この男は緊張というものをまるで知らないようだ。だからこそ順当に成長しているのかもしれない。

「それにしても明智先輩、僕は腹が減りましたよ」

「え、もう?」

私は腕時計を見る。銀の短針はまだⅡにすら届いてすらない。

「昼ごはん、食べなかったの?」

「食べましたよ、ちよつと早めでしたけど。ご飯に味噌汁にアジフライに……」

「早めとはいえ、それだけ食べてどうしてお腹が空くの

よ」

「そういうもんですよ。車内販売が無いのは誤算でしたね」

全く、そのお腹が語る通り食いしん坊な後輩だ。

「元気を出しなさい。商談なんてさっさと切り上げて、何か食べに行きましょう」

「本当ですか、じゃあ芋煮食べましょう、芋煮!」

丸顔に笑い皺を作りながら、水島くんは俄然元気になった。現金な後輩だ。

「それにしても、ずいぶん山深いところを走りますね」

後輩が私越しに窓の外を覗き込む。福島を出たつばき号はそれまでの俊足ふりが嘘のような速度で、くねくねと山林やトンネルを走り続けている。時折、木々の根元にうづくまる残雪が白い余韻を残して通り過ぎる。

『まもなく、米沢です。お降りのお客様は、ご支度をしてお待ちください』

メロディと共に車内放送が響く。水島くんはどっこいしよと立ち上がり、棚の上に向けたスーツケースを手にする。私のものも取ってくれた。

「はい、先輩」

「悪いわね」

山を越え、私たちの目的地に列車は立ち寄った。いつしか車窓には山林から、いささか車の目立つ地方都市が映し出されていた。

米沢駅では取引先の長井さんが迎えに来てくれるはずだが、出迎えてくれたのは長井さんではなかった。そもそも人間ですらなく、私の背丈くらいある黒牛のオブジエだった。牛の鼻からオレンジ色の鉄柱に縄が結わえ付けられ、その横には紺地に白抜き文字で『米沢牛』と

書かれたのぼりが下がっている。

「米沢牛ですか、芋煮もいいですけどこつちも捨てがたいですね」

背後から後輩の音が聞こえ、私は振り返る。……思わず、目の前のオブジェと水島くんの突き出た腹とを見比べてしまった。

「明智先輩、何ですかその目は」

「何も？ 行くわよ、長井さんは改札で待っているかもしれないし」

私はさつさと歩きだし、水島くんは慌ててどすどすついてきた。

思った通り、長井さんは改札を抜けたところで私たちを待っていた。

「ああ、明智さん。しばらくですね」

「お久しぶりです、長井さん。こちら部下の水島です」

「初めまして、水島です。本日はよろしくお願いします」

キャップをかぶった白髪のおじいさんを相手に、私と水島くんは頭を下げる。水島くんは朗らかな表情を崩さずに名刺を差し出した。

「長旅お疲れ様でした。車を用意してあります、こちらへ」

「いつもすみません」

長井さんは年齢の割にしゃんとした姿勢を保ったまま、すたすたと歩きます。今度は私たちが慌ててついていく番だった。

長井さんはべにばな農家で、私もかねてからお世話になってる。彼は白いバンに乗り込むとさつそく今年の種まきの話を始めた。

「今年も種をまく季節になりましたが、長期予報だとこの春は雨が多そうなのが気がかりですね」

山形の訛りが強い標準語で、私と水島くんに様々な話をしてくれる。後継者不足のことや、病害についての愚痴。手がかかるからこそなのか、どこか楽しそうに話をしてくれる。車は歩みを止めず市街地を抜け、車窓には田畑やさくらんぼの果樹園が広がるようになった。やがて長井さんは畑の脇に車を止め、私と水島くんはスライドドアから車を降りた。

「見てください、畝にどんな種を植えているんですよ。ほら、あの辺りは一週間前くらいに種をまいたのですが、もう芽が出ています。今のところ上々の滑り出しです」

「本当だ、かわいいですね」

水島くんはのっそりと畝の前でかがみ、少し細い目で小さな双葉を見つめる。

「かわいい……そうですね、手はかかりますがね、大事な子供たちです。生半可な相手には預けられません」

長井さんは水島くんの隣に腰を下ろしながら、少し低い声で言った。私はマスクの下で少し顔を強張らせ、掌に薄く汗を感じた。しかし水島くんはどこ吹く風で、ここにこそ小さな芽を眺めつつ質問する。

「べにばなって食べられるんですか？」

「ええ、食用油が取れるくらいですしね。成長の途中で葉を間引くのですが、その間引いた葉を味噌汁の具やおひたし、かき揚げなどにすると美味しいですよ。味もくせが少なくて食べやすいです」

「そうなんですか、みんなにも食べてもらいたいな」

どうやら長井さんは商談よりも食い気なこの男を気に入ったようで、にこやかに立ち上がると「行きましようか」と私たちに言った。

商談は畑から少し離れたところにある農協の応接室で

開始された。部屋がある二階の窓からはさつきまでいたべにばな畑が少し遠くに見える。

「本日はお忙しい中お時間を割いていただき、ありがとうございます」

プロジェクトが無いため、水島くんが長井さんに向けてパソコンの画面を直に見せる。長井さんの目がそちらに向いたのを確認し、説明を始める。昨年度の売り上げが好調だったことを踏まえ、今年も昨年同様にべにばな染めのグッズを仕入れることで話が決まった。しかし、本題はここからだ。

「東京での売れ行きに私たちは大きな手応えを感じました。なので、長井さんのお力をさらにお借りしたいんです」

私は少し力を込めて長井さんの目を見て、そして力を抜く。

「私も、長井さんのべにばなで染めたハンカチを愛用しています。この美しさをより多くの方に伝えたいんです。なので、長期的にべにばなの収穫量を増やすことはできないかと考えておりますが、いかがでしょうか？」

ポケットから少し湿ったハンカチを取り出す。暖かな橙色を目の前に、長井さんは少し目を細める。そして、話の続きを促すように小さく頷いた。

「農作物の収穫量を増やすのは簡単ではありません、それは理解しているつもりです。なので、私たちも長井さんからお力を借りるだけでなく、一緒に取り組んでいきたいと考えています。きれいなべにばなを皆さんに見ていただきたい、そう考えて……」

ぐううう。

場違いな音が響き渡り、応接室は水を打ったように静まり返った。少しして、水島くんが照れ笑いを浮かべな

が丸い腹をさすった。

「いやあ、これは失礼しました。昼食はしつかり食べてきたんですけどね、ははは」

長井さんは目尻に皺を寄せて笑いだし、私も釣られて口元が緩んだ。笑うしかないわよ、そんな間抜けな音を出されたら。

「明智さん、あなたの熱意は分かりました。ですがご指摘の通り、いきなり収穫量を増やせというのは無茶です。たださえ私も多分に漏れず後継者不足に頭を痛めているところですしね。なにせ、べにばなの栽培は手間暇を要しますから」

長井さんが皺の深い口を開く。表情は柔和だが、語り口は淡々としている。

「それに、べにばなの美しさだけを愛でられるのも……もちろんありがたいのですが、少し複雑です。べにばなはその美しさだけでべにばなたるものではないので」

私は思わず押し黙ってしまった。少し先走りすぎたか。どう立て直そうかと言葉を探っていると、隣から陽気な声が届く。

「そうですね、先輩。葉っぱをおひたしや味噌汁にすれば美味しいものを、美しさだけを押し出すなんてもったいないですよ。長井さん、短期間でべにばなの生産量を増やすことが難しいことは承知しました。ではべにばなの葉を使った料理など、食の方面に打ち出すことはできませんか？」

水島くんの言葉に長井さんの目が見開かれ、やがて指で頬の皺をなぞりながら考え始めた。

「鮮度などの課題はありますが、可能でしょう。私の所ですと、間引きした葉は自家消費に少し回すくらいでどこかに卸しているわけでもありません。有効に使って

ただけるのでしたらありがたい話です。ドライフラワーや染料以外の姿も知ってもらいたいですしね」

そのままあれよあれよと商談は進み、時期が来たら駅構内の直売所でべにばなの葉を食材として売り出す方向になった。べにばな栽培の拡大はもつと腰を据えて取り組むことで話がまとまった。水島くんがいなかったら、食材としてのべにばなは伝えられなかったかもしれない。

長井さんの車で駅まで送ってもらった。

「今日はありがとうございました、またよろしく願います」

「こちらこそ。明智さん、水島さん、また来てください。季節が合えばべにばな料理を振る舞いましょう」

私は笑顔で一礼し、水島くんも頭を下げる。しかし、水島くんは度が過ぎた空腹でへたばった表情を隠しきれない。

「あ、そうだ。水島さん、駅で名物の牛丼弁当を売っていますよ。おすすめですよ」

その言葉に先輩は人が変わったかのような笑顔を見せて、改めて挨拶を述べた。やはり現金な男だ。

ロータリーを去る長井さんのバンを見送り、私は水島くんを連れて駅舎の中に入る。白い洋風建築の駅舎は、だいぶ傾いた陽でべにばな色に染まっていた。

発車時刻までは二十分くらいある。長井さんが言っていた駅弁を買い求めるにはちょうどいい時間だ。駅舎の中を進むとキオスクや土産屋さんが軒を構えている。

「あ、先輩。長井さんが言っていたのってこれじゃないですか？」

水島くんは土産屋さんの冷蔵庫に平積みされた黄土色の箱を手を取った。彼の太い腕の横から顔を覗かせて

みると、白く縁取りされた赤文字で「牛肉どまん中」と印刷されている。

「米沢牛の牛丼弁当なのね、初めて見るけど美味しそうじゃない」

パッケージには半円状の穴が開いており、中身が見えるようになっていた。牛肉の大和煮とパセリが顔を覗かせている。

「あれ、しお味とみそ味もあるんですね。先輩、どれにしますか？」

先輩は黄土色の箱を戻し、紺色の箱と茶色の箱を肉付きのいい手で取り上げる。

「私はどうしよう、普通のにしようなかな。水島くんはどうする？ ご馳走するわ」

「え、いいんですか？」

先輩はばちばちと目を瞬かせた。

「水島くんがいなかったら、べにばなを食用にして売出すなんて思いつかなかったもの。今日の商談の立役者は水島くんよ」

「そ、そんなこと……ありますかねえ、ははは！ まああのアイデアくらい、僕にかかればチョチョイのチョイですよ。あ、もちろん明智先輩のおかげでもありますよ」

そう言って明らかに笑う彼は、先輩のおごりなら遠慮なくと言ってノーマル、しお味、みそ味を全部かごに入れた。ちよつと待て、そこまでの出費は聞いていない。

「いくら何でも食べすぎじゃない？」

「何言ってるんですか、腹が減っては何とやらですよ。これから忙しくなるんですから。それに、せつかく三種類あるのになつだけ食べるなんて、そんなの野暮ですよ」

あなたの食い意地が張っているだけでしょうが。まあいいか、もうすぐ給料日だし。私は苦笑いして、自分用

にも〈牛肉どまん中〉を手にする。私の細い手にはいささかずっしりと感じられた。

「先輩、これどうです？」

水島くんが私に見せたものは、佐藤錦さくらんぼの缶チューハイだった。東京に着いたらオフィスにも寄らず直帰することになってから、今から飲んでも問題ない。

「せつかくだし、買っていきましようか」

「お酒は僕が出しますよ、駅弁に加えてこれもご馳走してもらおうのはさすがに悪いので」

水島くんはそう言い、缶チューハイをかごに入れ、さつさとレジに並んでしまう。食べ物に関することについてはその丸っこい体に似合わず俊敏だ。

買い物を済ませて改札を抜け、ホームに向かう。空はべにばなで染めたように赤く、その奥には夕闇が迫っている。そんな空の下、帰りのつばさ号は時間通りにホームに滑り込んできた。

「あつ、べにばな」

「え？」

水島くんは私の声に振り返り、私は新幹線側面のマークを指差す。そこには、柔らかな色合いでべにばなの花が描かれていた。

「この橙色の塗装、べにばなの花を由来にしているのかもしれないわね」

つばさ号の塗装は紫と白を基調に、鮮やかな橙色の帯が走っている。ドアが開く。ぼつぼつと降りる乗客を待ち、乗り込んだ。

車内はけっこう混んでいたが、指定席を確保してあるため問題ない。黒いシートに腰を下ろし、早速缶チューハイに手を伸ばす。プルタブを引くと、ぷしゅりと高い

音がした。

「じゃあ水島くん、お疲れ様」

「先輩もお疲れ様でした！」

細かく結露が浮いた缶をぶつけ合う。こん、とちよつと詰まった音を立てた後、めいめいに缶を傾ける。少しつこいくらいに弾ける炭酸の後、すつきりと甘酸っぱい。

車窓が滑らかに動き出す。空はべにばな色を通り過ぎ、さくらんぼのように赤い。つばさ号のような紫もさつきより大きくなっていた。米沢ともしばらくのお別れだ。

列車が駅の構内を抜けて快調に飛ばし始める頃、隣の席で水島くんがレジ袋をガサゴソし始めた。

「いやあ、腹が減って死ぬかと思いましたよ。先輩も駅弁食べませんか？」

「んー、私はまだいいかな。先に食べてて」

水島くんはルンルン気分で〈牛肉どまん中〉を取り上げる。三つくらい買い込んだ彼はどれを最初に食べるか迷っていたが、最初は普通のやつに決めたようだ。黄土色の包みから割箸と弁当を取り出し、箸の入った紙袋を開け、ぱきりと割る。少し歪な割れ方など気にも留めない。

「では、お先にいただきます」

彼は蓋を開け、箸で牛めしを掬い上げる。掬い上げるというには大きな塊だ。しかし次の瞬間には箸から塊は忽然と姿を消し、食いしん坊な先輩は口いっぱい牛めしを頬張っていた。米粒の一つも残っていない箸先が、また大きく牛めしを持ち上げる。その様子を見ると、私も急速に空腹を覚え始めた。

「水島くん、やっぱり私も食べるわ」

「ふえ？」

先輩は口の中を空にしてから箸を置き、笑った。

「そうこなくっちゃ。これ美味しいですよ」

私は目の前のテーブルを引き出し、水島くんは待つてましたとばかりに私の分の弁当を置いてくれた。

「ありがと」

「いえいえ、明智先輩も早く食べてみてください」

急かされるように髪をゴムで結び、マスクを外す。包みを取り外すと透明なプラスチック製の蓋の下に、お弁当がぎゅーと詰まこまれている。七割くらいが牛めしで、さらにその七割くらいを牛肉の甘辛煮、残る三割をそぼろ煮が覆っている。思っていたより牛めしの量が多いけど、あのですしりとした重さを思い出せば納得だ。

「いただきます」

両手を合わせ、割り箸を割る。竹を割ったような真つ二つだ。牛めしに箸を差し入れると、手に重さを感じた時から心のどこかで予感していた、みっちりとした手応えが返ってくる。箸で掬い上げると、ぼろぼろとよく煮込まれた大和煮がこぼれ落ちる。それでも、私の一口には少し大きすぎるくらいだ。でも、私の空腹の前にはこの大ききなど敵ではない。

頬張る。

真つ先に口の中に広がったのは、深い甘辛さだった。少し冷たいご飯と一緒に食べるからこそ、決してしつこくない。それでいて、噛むたびに旨味を主張し、舌を喜ばせる。

「どうです、先輩？ 美味しいでしょう？」

私はぶんぶんと首を縦に振り、口の中が空になるのを待ちきれずに二口目に飛びかかる。少し味に慣れてきたのか、新鮮味は薄れ、その代わりにどこか懐かしいよう

な気持ちに襲われる。ふつくと炊かれたお米はもっちりしすぎず、かといつてばらばらしているわけでもなく、ちょうどいい硬さだ。

「先輩、口元にゴマがついていますよ」

「ふえっ」

慌てて左手で唇の端を拭う。

「取れた？」

「いや、もうちょい下です」

列車はトンネルに入り、窓をコンクリート製の闇が覆いつくす。鼓膜に走る違和感に窓の外を見ると、顎のあたりに金胡麻をくっつけた私の顔が映っていた。胡麻を指でつまみ、捨てるのも気が引けたため口に運ぶ。そのまま箸の上でスタンバイしていた三口目も口に運ぶ。小さなパセリが乗っていて、少しのえぐみと繊維質の食感がいいアクセントになっていた。

「こんな美味しい駅弁があるなら、もつと早く知りたかったですね。この新軒屋ってお店、レストランとかやったりしないかな？」

後輩はそう言いながらスマホを開き、片手間に缶チュー

ーハイを呷る。食べかけのままスマホをつつく人間はあまり好きではないのだが、驚くべきことに水島くんは既に一つ目の駅弁を平らげてしまっていた。

「水島くん、本当に早食いよね……」

「ははは、昔からよく言われるんですよ。給食も一番早く食べ終わっていましたね」

山奥で電波の通りが悪いのか、水島くんがスマホから目を上げるまで少し時間がかかった。私はその間におかずに箸を伸ばす。ニシンの昆布巻きを口に運ぶと、牛めしと対比させるような塩気が舌を刺激する。思わず唾液が出るのが分かった。

「どうやら米沢駅前に工場とお店があるようですね。ちえっ、知ってたら寄り道したのになあ」

「また機会があるわよ。べにばなの葉の件で長井さんにお会いするのも、たぶんそう遠くないでしょうし」

口を尖らせていた水島くんは私になだめられて気を取り直し、次の駅弁の包みを開け始めた。塩味と味噌味のどちらにするか迷っていたみたいだが、やがて紺色の包みを先に開けた。塩味を選んだようだ。

私は一度箸を置き、飲みかけの缶チューハイに手を伸ばす。缶は下半分がびつしりと結露で覆われ、中身は少し気が抜けていた。それでも、さくらんぼの甘酸っぱさがすっきりと口の中を仕切り直す。

少し酔いが回ったのか、一つあくびをする。目にうつすらと浮かんた涙をまばたきでごまかし、また箸を手にする。今度は弁当箱の隅に置かれた桜漬を一枚、口に含んでみた。ぱりぱりとした食感に、かなりの塩気。漬物だけでは少ししつこい味付けで、追うように牛めしを口に運ぶ。すると、塩気が今まで以上に大和煮の甘辛さを際立たせる。

桜漬との相性が思っていた以上で、箸を進める速度がぐんと上がる。牛めしの上に薄桃色の漬物を乗せ、口いっぱいに頬張る。甘辛さに塩気がプラスされて、互いの旨味をより一層引き出す。しかし人の舌は贅沢なもので、この美味しさにいささか飽きを覚えた私はまたおかずに箸を伸ばす。今度はかまぼこに目が行った。見た目には何の変哲もない普通のかまぼこなのに、牛めしの甘辛さの余韻が残る口に運んでみると、塩気だけという味付けが新しく、そして優しい。ふりふりの食感を楽しみながら窓の外を見ると、明かりの類は一つも見えない。山道は夜闇と溶け合い、何も見

えない。列車が右へ左へ蛇行する動きで、峻険な峠越えを想像するしかない。

「真っ暗ですね。もういい時間ですし、仕方ないか」

水島くんも私の視線に釣られたのか、窓の外に目をやる。すると、いきなり闇の雰囲気が変わった。夜とは違う人工的な闇。どうやら建物の中に入ったみたいで、次の瞬間には水銀灯の明かりと無人のホームが流れ星のように走り去っていった。

「駅みたいですね。こんな山奥にも人が住んでいて、暮らしているって考えると不思議な気分になりますね」

「そうね、人が住んでいるような車窓じゃなかったし」私は水島くんの方を振り返り、そして彼のテーブルに目をやる。二つ目の弁当は既に八割くらいが空になっている。塩だれで煮込まれた牛肉は、私のものよりも色が浅い。

「水島くん、一口もらっていい？」

「えーっ？」

水島くんはわざとらしく顔をしかめた。しかし次の瞬間にはころりと表情を明るくし、弁当箱を私の方に差し出す。

「冗談ですよ、がつつり行っちゃってください」

「どうも、じゃあ遠慮なく。直箸でごめんね」

少し小さめに塩味の牛めしに箸をつける。小さめにしたつもりなのに、ご飯が固まっていて結局大きな塊が取れてしまった。

「先輩、いい食べっ。ふりですね」

「誰のせいだと思っているのよ。真横でそんなに美味しそうに食べられたら、私だって箸が進むに決まっているじゃないの」

そのまま大きく口を開き、詰め込む。思っていたより

もコショウが効いていて、ぴりつとする。それでもコクの深さはさつきまで私が食べていた牛めしに負けず劣らず。塩コショウで美味しい肉は最強だ。飲み込んでしまふのが少し寂しいような気がしつつ、いいかげんぬるくなった缶チューハイで流す。

「少しあつさりしていますが、悪くないでしょうか？」

「そうね、二種盛りとかあったらいいのにね」

私は自分の弁当に向き直り、甲斐の煮物に箸をつける。そういえば、水島さんと芋煮を食べる話をしていたけどおじやんになってしまった。まあいいか、また機会があるだろう。小芋には鰹節がまぶされていて、食べてみるとねっとりした食感の中からおだしのようないい香りが出た。

気が付くと私は大和煮を食べ終え、牛そばろが私を出迎えてくれる。水島くんは味噌味の封を切る。列車はいつしか峠を越え、車窓には街の灯が見えるようになりつつあった。そろそろ福島に着くようだ。

そばろ飯を箸で取り上げると、肉そばろがぼろぼろとこぼれ落ちる。まずは一口食べてみると、大和煮よりも細かい食感が口に広がる。味付けも心なしか大和煮の時より穏やかな気がするけれど、それは味に慣れただけかもしれない。残り少ない桜漬と合わせてもう一口。塩気が少しダイレクトに舌の上を舞う。そばろ飯はきめが細かいため、比較的大き目な桜漬が目立つのだろうか。

車内にチャイムが鳴り響き、福島への到着を告げる。両手で数えるには少し厳しいくらいの人数がめいめいに立ち上がり、荷棚から荷物を降ろしたり、デッキに向かったりする。列車はいつしか坂を上がって高架橋に入り、駅の構内で停止した。でもドアは開かない。車掌さんがやまびこ号との連結をアナウンスすると、列車はゆっく

りと前進し、やがて押し込むような細かい振動を伴って停まった。ドアが開き、通路にあふれていた人の列が流れていく。

「先輩、味噌味も食べます？」

水島くんが新たな弁当箱を私の方に差し出す。最後に残した味噌味だ。見ると、早くも中身は半分ほど消えている。

「いいの？ じゃあ一口」

箸を伸ばし、掬う。味噌で煮込まれた牛肉は少し赤っぽい茶色だ。口に運ぶと、思いのほかパンチの効いた味噌の濃厚な味わいに少し驚く。

「先輩、さつき二種盛りって言っていましたけど、僕は三種盛りが欲しいですね」

「同感ね、どれも美味しいのに私は胃袋が一つしかないし」

「やだなあ、僕だって胃袋は一つしかありませんよ」

「あなたはその一つが規格外なんじゃないか」

幾人か乗客を迎え入れてからドアが閉まり、つばさ号はまた走り出す。今度は心を入れ替えたかのようにぐんぐんと速度を上げ、車内に風切り音と細かい横揺れが響き始める。北の大幹線に足を踏み入れ、車窓には街の灯が現れては消え、消えては現れる。

駅弁の残りに箸をつける。卵焼きを食べてみよう。ふわふわな食感に、やはり塩気。おかずは甘辛い牛めしに合わせて塩気を効かせた味付けで統一しているようだ。

そばろ飯にまた箸を伸ばすも、あと一口を残して桜漬が無くなってしまった。原点回帰、最後は最初の一口と同じ味付けでいたどころ。

おかずも残り一品、人参の煮物。口に運ぶとほくほくの食感に、やはり塩気のある出汁が染みた優しい味。も

う少し早く食べて口直しにしても良かったかもしれない。さあ、最後の一口。そばろ飯を頬張り、こぼれ落ちた肉そばろを箸で丹念に拾い上げ、口に運ぶ。おかずや桜漬の余韻が口に残る中、甘辛い肉そばろとふつくらした白米の組み合わせは、寂しさを覚えるほどに美味しかった。

「ちそうさまでした」

「ちそうさまでした。ああ、満腹だ」

期せずして水島くんと同じタイミングで箸を置いた。私もお腹いっぱい、それなのに不思議と胃もたれはせず、満腹だ。水島くんは口元を隠しながら爪楊枝を使った後、私の弁当殻も一緒にデッキのごみ箱に捨てる。

「悪いわね」

「いえいえ、ついなので」

デッキの後輩の巨軀が消えるのを見送って、私は髪をほぐし、マスクをする。窓を見ると、暗闇の中に街明かりとアルコールで眠そうな目をした私が映っている。満腹感と列車の小刻みな振動に、私は大きくあくびをした。つばさ号はいつの間にか宇都宮を出た。もう車窓に街の灯が途切れることはないだろう。終点まではまだしばらくかかる。

水島くんがデッキから戻り、私の隣にどすと腰を下ろす。その揺れで私は少し目が覚めた。

「美味しかったですね、明智先輩。でも次こそは駅弁だけでなく芋煮も食べましょうよ」

「そうね、べにばな料理もね……」

口ではそう言いつつ、次に「牛肉とまん中」を食べる時は塩味にしようか、それとも味噌味にしようかと迷いながら、私は眠りに落ちていった。